アイントホーフェンデザイン留学体験

-オランダのデザイン、文化への傾倒-

yas lab デザイナー　廣瀬 康仁
Yasuhito Hirose

オランダ、アイントホーフェンへ

オランダに来てすでに5年が経っています。高校生の頃は想像もしていませんでした。海外に対してそんなにあこがれも意識も無かったのですが、新潟大学の在学中に留学経験のある先生の影響を受け、ヨーロッパに一人旅に出た事が、それまでは遠い存在だった海外を身近に感じるきっかけになりました。違う文化や人に触れる事がとても新鮮で刺激的で、もっといろんな物事を見て、自分のデザインに対する考え方を模索したいという思いで、留学する事を決めました。

デザインといえば、北欧やイタリアが定番でしたが、当時のdroog designに代表されるダッチデザインのリサーチ、プロセス、コンセプチュアルデザインにとても惹かれ、そして自分の好きなデザイナーたちの多くが卒業しているDesign Academy Eindhoven（以下DAE）を受けてみようと、ウェブでおおよその情報を得て、open day（オープンキャンパス)に行きました。そこでポートフォリオを見せながら面接をしてもらい、学部を希望していたのですが、日本で学部を卒業していたので、大学院を進められ、IMコースに入ることにしました。

デザインスクールとして世界でも有名なDAEは留学生が多く、特に大学院はほとんどが外国人なので英語で授業が進められます。フランス、ドイツ、イタリア、ポーランド、ラトビア、オーストラリア、モザンビーク、韓国、シンガポール、アメリカなど、まさに地球上の様々な違う文化のもとに育った同級生の話す事、考えている事がとても刺激的でした。とはいえ、僕が入った学年は半分以上が英語圏出身か英語圏での生活経験がある人たちだったので、始めはみんなの話している事を聞き取る事すらままならい状態でした。なので、よく授業が終わった後に友達に教えてもらっていました。もともと苦手だった英語もそれで上達しました。それよりも苦労したのが、先生たちは週に1回しか来ず、そこで20人ほどの相手をするので昼過ぎには疲れてしまっているし、工房も昼休みは使えなく、素材を買いにでかけても、冬は夕方5時には店が閉まり、日曜はどこも休みと、日本にいた時と違う習慣に慣れるのに時間がかかりました。それにろくに話も出来なかった第一印象の悪さが相まって、先生たちにはなかなか相手にしてもらえず、正直辞めようとも考えましたが、友達の励ましもあり、学部に移る事にしました。

デザインのプロセス

学部は約8割がオランダ人ですが、それでも外国人がいるクラスは英語で進めてく

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

れます。オランダ人は自国が小さいので英語も使えないと仕事に広がりを持てないと考えていて、英語を進んで使うようにしているようです。

授業では、それぞれの学科が、学期ごとに1つ大きなテーマに沿って課題を出します。 学校のエクスカーションがある時もあり、その時のテーマに関連のある展示や、町、工場の見学にいったりしてリサーチをします。そのリサーチを元に毎週クラスでそれぞれの進捗を発表しながら課題を進めていきます。プロセス重視する傾向があるので、毎回が小さなプレゼンという感じでした。与えられたテーマから関連するプロダクトやイメージ等を集め、コンセプトを紡いで、それをプロダクトにしていくというステップをそれぞれの段階で区切り、人に見せていくことで、自分のデザインにロジックが備わり、自信をもてるようになってきました。

しかしながら発表では、自分を主張する事を小さい時から教育され、口が立つオランダ人には自分は性格的にも正面から太刀打ちできないと思ったので、発表の仕方はテンポよく進めるために言葉を少なく絵で見せ、分かりやすくする方法をとるようになっていきました。言葉を絞るためにデザインのどこが焦点なのか、またそれを絵にして目で確かめることによって、発表の仕方を明確にできるようになりました。

生（なま）なデザイン

DAEの特色は全ての学科がman and …(activity, living, identity, communicationなど）で始まるように、人と物の関わり方でカリキュラムが構成されています。素材にしばられず、広い視野でデザインを進めていけます。そのために実際の制作には木工、金工、プラスチック、セラミック、テキスタイルの工房があり、それぞれインストラクターがいるので分からないことはそこで相談したりもできます。

プラスチックの工房でキャスティング（それぞれの道のインストラクターがいるので、新しい素材にもいろいろチャレンジできました。）

そして、もう1つの特徴としてKOMPASという副専攻のようなものがあります。ここではいわゆるデザインの一歩前の段階を学びます。デザイナーの個性に目をむけ、アート作品を作る‘ATERIER’、インタラクション、素材の研究の‘LAB’、カルチャー、ソーシャルデザインの‘FORUM’、これからのデザインの需要に向けての‘MARKET’があり、学科との組み合わせにより多様なデザイナーのあり方を身につけていけます。例えば、僕のとったLABでは興味を持った素材の性質や成り立ちからリサーチをして、アウトプットを特定せず新しい表情や使い方を試していったり、インタラクションの授業では、すごくアナログにプロダクトの形や動きがどのように人に訴えるのかを試作したものをみんなで試して評価したり、とデザインの元になるような実験をしていきました。オランダのデザインに惹かれていた理由がそういった新しい素材感や、作り込まれる前にある生（なま）な感じだと気づかせてくれ、自分のデザインにとても

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

影響を与えてくれました。

学科とKOMPASの講評が週に3、4つ重なる学期末は朝から作業スペースの取り合い、夜はプレゼンの準備と次の日の作業を効率よく進めるための準備で寝る間も無いような状況になります。しかし、いくつかのプロジェクトを同時に進める良い訓練になりました。複数のプロジェクトを進めていると、頭も回転が良くなるのか、1つに集中してやるよりも意外とペースが良くなる時もあります。

学期の始めの時期は、リサーチの始めでゆったりとしているので、クラスメイトが集まってバーベキューをやったり、牧場にいってそこでチーズとワインを買って外で食べたりと、小さい町ののんびりした空気を楽しみました。またアイントホーフェンは小さいながらも空港があり、長期の休みには格安チケットで遠くに出かけたりしていました。ミラノサローネ、ヴェネチアビエンナーレや、ミュンスターの彫刻祭、ドクメンタなどヨーロッパのアートイベントにも行くことができました。

友人宅でのバーベキュー(休みの日はマーケットに買い出しに行って、クラスメイトで集まってそれぞれの国の料理を披露したりしました。)

allan wexlerによるワークショップ（年に何度か外部からも講師を招きワークショップがあります。）

インターンシップや、展示のオープニングなどの機会に、 Jurgen BeyやTejo Remy、Arnout Visser、Marijn vander Poll、Miriam van der Lubbeなど一線で活躍されているデザイナーたちと会うこともあります。みんなフランクに話をしてくれます。こういった人との距離の近さがオランダの魅力でもあります。卒業後もOMA、West8などの建築模型を作っているVincent de Rijkのところでアシスタントをしていた時期に日本でオランダデザインの展覧会の企画があったので、そこに招待する事もできました。

何事もまず聞いてみること

海外の学校は入ってからが大変とはよく聞きますが、DAEも他聞にもれずそうでした。4年制ですが、一年生から入った生徒が4年で卒業するのは10%程度で、僕自身も3年次からの編入でしたが、卒業まで3年かかりました。

母国とは違う文化の中、違う言語でコミュニケーションをとることは、今までなん

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

となく進んでいたことが、共通する部分が減るために、そうはいかなくなります。もちろん人同士なのでだいたいは同じなのですが、自分に相手の考えていることが分からないように、相手もそうなので、来た当初それで躓いていたこともあり、話を多くすることを心がけるようになりました。デザインでも、何をやってもやはり人と人の間でする事で、人との関わりがとても重要なのだと実感できましたし、そう考えて人と接することで良い意味で敏感になり、自分の思っている事を言葉にすることで自分にとってもクリアにもなっていきます。

友達に教えてもらったオランダのことわざで「何ごとも、まず聞いてみないことには始まらない。」というのがあります。それを聞いた時は、まさにその通りだと思いました。自分から何らかのアクションを起こせば、何かが起きてくれます。人と人の距離が近いオランダだとそれがたくさん起こるように思えるのです。そんな事をいろいろと経験する中で、自分で切り開いていく自信を持てるようになりました。

そして卒業を前にリートフェルトアカデミーなど他の学校の生徒と展示を企画し、アムステルダムのロイドホテル、東京のオゾン、ライデンのシーボルトハウスと3展示を成し遂げ、卒業制作もいくつかの雑誌に取り上げられ、展示の機会もいくつか得られたので、オランダを拠点にすることを決心しました。

DAEでは英語だけで生活してきましたが、英語ではたくさんの情報を逃していると感じていました。働き始めて、英語が苦手なクライアントだったり、プロジェクトに参加してみても外国人は僕一人だったりということもあり､オランダ語を勉強中です。「世界は神が創ったが、オランダはオランダ人が創った」といわれるように低地を開拓し、株式を編み出し、ニューヨークの地盤を築いた論理的なオランダの文化へもう一歩近づけば、まだまだ学ぶところがあると思います。

また最近、地元のバスケットボールチームに参加するようになりました。オランダではあまりメジャーではないのですが、ロッテルダムくらいの街だとたくさんチームがあります。身長2m、体の厚みが倍くらいあるような体格の人もいるので、日本ではフォワードだった僕もガードよりにならざるをえません。とはいえ、170cm程の人でもダンクできる身体能力をもっていたりするので、プレーをしながら間近で見る事ができて楽しいです。そして自分もチームに貢献出来るようにがんばる励みになっています。

3.11

3月に起きた東日本大震災は、その日の朝（オランダ時間）、オランダの友人からのメールで知りました。ニュースを見て心配してくれたようです。始めはニュースの映像を見ても映画を見ているようでした。

こちらの新聞やテレビでも数日間トップニュースで取り上げられて、かなり関心が高く、そこから何週間かは人に会う度に「日本は大変なことになっているけど、家族や友人は無事か？」とみんな心配してくれました。幸いにも親類知人は大きな被害に遭っていませんでしたので、大丈夫とは言うのですが、後の言葉に詰まるばかりでした。ある知人は、被災者の皆さんの避難所での様子の映像に衝撃を受けたようです。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

よくあのような過酷な状況で寡黙に生活を送れるな、と日本人の忍耐と穏やかさに感心していました。

先月は震災後初めて日本からの貨物がオランダに届く時も放射線の検査を慎重に行うというニュースもありました。港で働く人の安全性を考えると正当なことだと思いますし、当初は在蘭日系企業も日本製の物を買ってもらえなくなることを懸念していましたが、それからはニュースもなく、過剰な反応も問題も無いように感じられます。

オランダの各都市でも様々なチャリティーイベントが行われ、たくさんの人が参加し、被災地の復興を願っています。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.